

13	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14104014	細胞老化の分子機構解明及び老化を標的とした癌分子標的療法の開発	和氣 徳夫(九州大学・生体防御医学研究所・教授)	A
(意見等) 本研究は子宮体癌細胞・絨毛癌細胞を対象として老化誘導遺伝子・分化調節遺伝子に関する新しい遺伝子の単離・同定を達成しており、研究は着実に達成されている。具体的には、子宮体癌老化誘導遺伝子 ORF12、絨毛癌老化誘導遺伝子 HTF12、絨毛細胞分化調節遺伝子 NECC1/HOP 遺伝子などの同定、Ras/Erαシグナルの解明、MDM2siRNA の応用、HDAC 阻害剤を用いた細胞老化に関する研究があげられ、学術的価値は高いと判断される。HTF12 の機能解析、細胞老化誘導と p21 機能ドメインに関する研究・細胞老化誘導関連遺伝子及び HDAC 阻害剤による老化誘導分子機構の解明など、非常に有用な課題が多く残されており、今後更なる発展が期待される。				
14	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14104015	骨形成機構の総括的解析とその応用	山口 朗(東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・教授)	A
(意見等) カエル骨形成の解析、ヒト間葉系幹細胞株の樹立、骨芽細胞の分化を調節する転写遺伝子の解析、さらに、それらの研究成果を臨床応用へと結びつける総括的な研究である。ヒト間葉系幹細胞株の樹立と骨芽細胞の分化を調節する転写遺伝子の解析では当初の計画が順調に遂行され、その成果は一流学術雑誌に公表されている。高い学術的評価を与えることができる。カエル骨形成の特徴を生かした実験系を確立する研究は、その着目点は十分評価できるものの、当初の計画より遅れカエル軟骨細胞の培養系が確立されたところである。ただ、本研究グループに蓄積されてきた研究手法を適用することで、この遅れを取り戻すことはさほど困難ではないと考える。3 番目の課題である臨床応用へ結びつける研究は、前記 2 つの研究課題と少し毛色が変わった研究であり、少し散漫な印象を受けた。 全体として、研究代表者の従来から行ってきた研究領域では手堅く研究成果をあげ、その業績は高く評価できる。しかし、他の部分では一層の努力を期待したい。基盤研究(S)であるので、総括的解析と力が入りすぎた申請書になっており、手堅く研究成果をあげるのか、それとも、遅れた部分を推進するために研究体制の再編をするのか、一度十分討論することが望ましい。研究費に関しても、ほぼ 5 年間均等になっており、研究の進展に応じたもう少しメリハリのある配分が望ましいと考える。				